



TITLE:

<學界展望>最近の南北朝時代史研究: 中國における時代區分論を中心として

AUTHOR(S):

狩野, 直禎

CITATION:

狩野, 直禎. <學界展望>最近の南北朝時代史研究: 中國における時代區分論を中心として. 東洋史研究 1959, 18(2): 203-208

ISSUE DATE:

1959-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/148144>

RIGHT:

學界展望

最近の南北朝時代史研究

—— 中國における時代區分論を中心として ——

魏晉南北朝時代を、どのような時代として把握するかということ、時代區分の問題とも関連し、むづかしい課題である。我が國では周知の通り、この時期を中世として捉える所謂京都學派と、この時代は依然として古代であるとする歴研派とが、大きく對立している。これは要するに後漢・三國の間に社會の變化を認めるか認めないかということになるのではないかと思うが、そのためには先ず、歴研派などで古代帝國として同次元で捉える、漢王朝と唐王朝との比較研究がなされるべきである。西嶋定生氏のいう、漢も唐も「各々が特殊具體的な構造をもつもの」とはいえ、同じく基本的には古代社會の法則が貫徹しているということが了解され」（鈴木俊・西嶋定生編「中國史の時代區分」東京大學出版會、一九五七 所収。西嶋定生「中國古代社會の構造的性質に關する問題點」）るかどうかということが追及されねばならないであろう。それとともに南北朝時代プロパーの研究がもつとなされるべきである。特に歴研派では土地問題など二・三の問題については研究が進められているが一般にいってこの時代の研究が少し手薄なのではないであろうか。これは中國の學界についても同じようなことが言えるのであるが、さて、最近我が國では二つの南北朝史の專著が出版された。一つ

は宮崎市定博士の「九品官人法の研究——科舉前史」（東洋史研究叢刊之一 一九五六）であり、もう一つは宮川尚志博士の「六朝史研究 政治・社會篇」（學術振興會 一九五六）である。いずれも南北朝時代の制度・社會について緻密に論ぜられた雄篇であるが、特に宮崎博士のものは、第一編緒論に「漢より唐へ」、第三編餘論に「再び漢より唐へ」という副題が附けられていて、漢と唐とは別の原則が支配する世界であるとの見解が、その基礎に横たわっているのである。一方唐代までを古代とする考えの立場からは、南北朝のみを扱ったものではないが、木村正雄氏の「中國の古代專制主義とその基礎」（歴史學研究二一七號 一九五八）が最近の問題作としてあげられる。これは「中國の古代デイスボティズムの基礎構造は直接個別の人身支配（木村氏はこれを人頭的支配と呼ぶ）體系であり、このような支配を可能にしたのは、國家が全治水水利機構を占有支配することによつて農業及び農民を支配し、商工業材料乃至商品の產出源としての山川鑛澤を占有支配することによつて商工業及び商工業者を支配して行つたからである。そして、このような支配機構は兩税法が施行されるまでつづいた」として、唐代までの古代説を再確認された。これはウィットフォードによつて提出されて以來、しばしば論争の題材となつた「水の理論」を飛躍的に展開せしめたもので、木村氏の考え方の可否は兎も角、中國古代史研究に大きな課題を投げかけた作である。なお附言すれば、この木村氏の提出した問題を含んで中國古代史の動向と進路を整理されたのが、増淵龍夫氏の「中國古代デイスボティズムの問題史的考察」（歴史學研究 二二七號 一九五九）であり、天野元之助氏は「中國古代デイスボティズムの諸條件」（歴史學研究 二二三號 一九五八）

において、華北の農業技術の面から見て、國家による灌漑管理を必要としないことを述べて、木村氏の理論に反論を出されている。

さて先にも述べた如く、木村氏のこの論文は、南北朝時代を特に論じたものでなく、その記述も理論構成に主眼がおかれているので、具體的な記述にかけているのも或る程度已むを得ないことで、ここでこれ以上述べるのは適當でないかも知れないが、氏のこの理論が承認されるためには、問題を南北朝に限つても、具體的な論證を必要とする基本的な問題がいくつかあるようである。例えば人頭的支配に對する具體的政策として、假田（漢）—屯田（魏）—課田（晉）—均田（北魏）を考えられているが、では豪族の下に走つた人民には、どのような形で人頭的支配を行つたか。恐らく、國家が豪族を通して支配を貫徹していつたとされるのであらうが、國家と貴族・豪族の力關係を考える時、果してそれが可能であつたか疑問なきを得ない。特に南朝の場合が問題で、氏は江南はそうした農業に對する國家的規整の契機を缺いたことは認めていられるし、兩稅法的戸等支配體制への轉換も、こうした江南に對する國家經濟の比重が増大したことにありとされるのだから、このようなモメントを內在せしめている南朝に對する考慮がもう少し拂わるべきではないであらうか。それはひいては南北朝の時代性を決定することにつながることであらう。

この外、最近の我が國の東洋史學界では、川勝義雄氏と五井直弘氏との間の曹操政權の構造についての論争、濱口重國氏や越智重明氏の諸論考、西嶋氏の屯田制に對する新見解など、觸れねばならぬものも多くあるが、これらの問題は毎年發行される史學雜誌、その他の諸雜誌に述べられているので、一切省略させて頂いて、あまり

紹介がなされていない中國における最近の研究を取り上げたい。

× × ×

林純夫「關於中國古代史分期問題」（科學通報 一九五五・四）及び江泉「關於中國歷史上奴隸制和封建制分期問題的討論」（新華半月刊 一九五五・一七、歷史研究編集部編 中國古代史分期問題討論集 三聯書店 一九五七 所収）、翦伯贊「關於中國歷史分期的問題」（東洋史研究 十四・四 一九五六）らによると、中國には最近古代史の時代區分について三つの意見があるようである。

* 林甘泉「中國の歴史に於ける奴隸制社會と封建制社會の時代區分についての論争」（人民中國 一九五六・九）はこの譯である。

* * これは翦氏が一九五五年來朝した際の講演の原稿で「中國史の時代區分の問題について」（鈴木・西嶋編 前掲書所収）はその譯である。

* * * 中國に於ける時代區分論については、内藤戊申氏の「東洋史の時代區分論」（愛知大學文學會 文學論叢第十輯・第十一輯 一九五四、一九五五）、「中國史分期論に關する覺書」（同特輯號 一九五七）に詳しく述べられている。以下一々註記しなかつたが、本稿はこれらによる所が多かつた。

第一は西周より封建時代に入るといふ説、第二は西周は未だ奴隸社會で、戰國時代が、奴隸制社會から封建社會へ移つていつた時期であるとする説、第三は漢代も奴隸制社會で、後漢末に變革期を認める説である。何れの説によるにせよ、南北朝時代が封建制時代として捉えられることに變りはない。しかし第三の説は比較的新しい説で、中國でも未だ一般的には認められていないようだが、最近かなりこの派の人の論文が見られるので、中國の歴史學界の展望とし

ても、やや變則的かも知れないが、敢て取り上げることにする。

*かつて社會史論戰が華やかなりし頃、陶希聖によつて、三國以後中世説が取り上げられたことがある。

*學校の教學方針としては第二の説が採用されている。(歴史研究 一九五六・十)

さてこの第三の説に屬する人として、林氏は、童書業・王仲犖、江氏は尙鉞・王仲犖を擧げている。この中、童・王兩氏は山東大學に、尙氏は人民大學に屬する人であることが先ず注意される。

童書業氏の説は前記内藤戊申氏の「東洋史の時代區分論」續の方に詳しい紹介があるのでそれを見られたいが、その後童氏はこの立場を捨てて、第一の立場に變つてしまつた(宋錫民「山東大學歷史系中國古史分期問題的討論」歴史研究 一九五七・八)。

*これはソ聯のドゥマン氏が、かつては三國以後封建説を取りながら(岡本三郎「中國における古代の成立と崩壊についての一考察」歴史學研究 一五〇 一九五〇)、一九五七年の國際オリエンタリスト會議のレポートでは漢代は封建的諸關係が支配的な時代であつたと主張するのと(杉村壯三譯「西漢時代の社會經濟制度について」東洋史研究十七・二 一九五八)發を一にする。

王仲犖氏の意見は「關於中國奴隸社會的瓦解及封建關係的形成問題」(文史哲 一九五六年三・四・五 歷史研究部編輯前掲書所収)に展開されている。王氏は中國の封建社會は魏晉の頃より始まり、これに先行する夏より東漢までが奴隸社會であるとする。そして奴隸社會を戰國を境として二つの時期に分けている。この論文は量的にも随分長く、その取扱う時代の幅も夏より魏晉までに廣がついて

るので、東漢末變革期についての彼の考え方を紹介するに止める。王氏は漢代を奴隸制が發達した時期と考える。しかし生産力の發展の結果、奴隸制は生産力の發展を阻害するようになった。大土地所有者は奴隸に自分の土地を耕作させることをやめて、政府の課す重い負擔に苦しんで、その結果没落していつた農民に土地を租給して耕作させるようになり、農民は農奴化し、一方奴隸は逆に上昇して農奴化した。斯くて矛盾におち入つた奴隸制社會は、黃巾の亂等の農民反亂が起つて崩壊してしまい、封建的關係が表面に現われるようになった。最初封建土地所有者は漢帝國の官僚や商人出身者が多かつた。所で彼等封建土地所有者が父家長的色彩を濃厚にしているのは、中國には遅くまで、氏族制度が残つていたからである。後漢滅亡後立てられた魏・吳・蜀三國の内では、蜀は最も遅れた社會に屬し、吳において最も封建形態が發展していた。それは吳が屯田客を豪族に賜與して(復客制)、彼等の封建貴族化を助けたからである。これに對し魏は封建制への過渡的な政權であつた。それは魏が世家豪族大地主勢力を、一方では抑壓せんとしながら、他方ではこれと妥協して行かねばならなかつたからである。また魏の屯田制は、軍屯は勿論、民屯においても軍事的束縛が強く、負擔も重いもので、隸農形態の生産組織である。魏を亡ぼした晉は完全に封建國家であつた。晉は屯田を廢止して、國有の土地には占田法を實施したが、占田民に對する政府の支配形式は、大土地所有者と農奴の關係と同じものに外ならなかつた。かくて中國は魏晉時代より封建時代に入つたのである。

次に同じく山東大學の張維華氏の説を紹介すると、張氏は春秋時代までを奴隸社會とし、戰國・兩漢時代が奴隸制から封建制への過

渡期で、三國魏晉時期に封建制が成熟したという（「論自戰國初年至東漢末年是中国歷史上由奴隸制過渡到封建制的一個時期」文史哲一九五七・三 文史哲叢刊第二輯「中國古史分期問題論叢」中華書局一九五七所収）。張氏は漢代の大地所有者の經營と、國家が國有の土地に施行した假田制が、そこに働く農民を農奴化し封建制を胚胎させたが、これは當時の生産力の向上に適合するという。

つぎに尙鉞をはじめとする人民大學の人達の論に移る。尙氏には「中國歷史綱要」（人民出版社一九五四）がある。その中では尙氏は「古代史の時代區分については未だよく分つていないからそれには觸れず具體的な歷史事實を述べるにとどめる」として、はつきりと彼の時代區分論を表面に打ち出していないが、だいたい封建時代は三國より始まるという想定のもとに記述がなされたようである。人民大學からは先に王思治・杜文凱・王汝豐「關於兩漢社會性質問題的討論——兼評翦伯贊先生的『關於兩漢的官私奴婢問題』——」（歷史研究一九五五・一）が出て漢代奴隸説を提出し、一連の論争をまき起したが、最近、同大學歷史研究室は「中國奴隸制經濟形態的片斷探討」「中國封建經濟關係的若干問題」（三聯書店一九五八）の二部の書を出し漢代奴隸社會、三國以後封建社會説についての論文を集めた。前者は時代的に言えば漢代までを扱つたものなのでここには觸れないが、尙鉞は序文で漢代奴隸社會説を確認している。後者は魏晉南北朝關係のもの三篇、唐代のもの三篇、元・明・清のもの各一篇計九篇より成つている。ここに最初の三篇についての紹介を行う。

（1）潘德深「論曹魏屯田制」 この論文は魏の屯田制が、奴隸制生産方式の瓦解と封建制生産方式誕生の問題を解決する鍵である、と

いう考えを基礎にして展開される。後漢時代に生産力が上昇し、奴隸制生産關係は生産力を發展さす上での桎梏となると、この舊い生産關係と新しい生産力の矛盾は黃巾の亂となつて爆發し、奴隸制社會を破産し、封建的な生産關係が打ち建てられた。その具體的な表現が屯田制である。屯田制は軍屯・民屯を問わず、主要な生産手段は國家の所有に歸し、國家は生産者を土地に縛り着けた。こうして國家と屯田民との關係は封建地主と農民の關係となつた。一方それと併行して大地所有者の莊園が生まれるようになった。それとともに貨幣經濟が衰えていくが、これは封建時代の特徴である。こうした下部構造の變化が上部構造に影響して、法律・道德・哲學・藝術も變化した。一方、吳・蜀は依然奴隸制末期に停滯していたため滅亡してしまつたが、それは歴史の自然である。そして晉が魏に代つた時、中國全土に封建制が確立した。

（2）羅明「魏晉南北朝時期生產關係的變化」 この人は現在の中國では封建制の成立をもつともおそい時期にしている人かと思われる。羅氏は三・四世紀を過渡期と考えている。「後漢末黃巾の亂以後、中國社會には大きな變化が起り、奴隸制生産は破産され、自給自足の小農經濟が發展し、貨幣經濟は衰え、自然經濟が盛んとなつた。しかし三國以後にも、なお奴隸制は残つており、封建制が完成したわけではなかつた。三國以後の數百年の間に生産力は緩慢にはあるが増大し、封建關係の發展に寄與した。また政府は、その占有している土地と労働者を確保しようと努めたが、その努力は少しも効果がなく、土地は絶えず封建主の莊園に入り、自由小農民は封建主の下に投じて農奴となつた。これは絶えざる戦争と、重い賦税・徭役によつて加速度的に増加していった。奴隸は兵士に當てられ（發

奴當兵」るか、或は直接解放されるかして農奴となつた。かくて三國以後數百年を経て中國の封建制は成熟の段階に入つた。

(3) 張耀祖「北魏土地制度」これは均田制の實施は拓跋族が氏族土地所有制から封建土地所有制に變つたことを示すものである、という考えの上に組み立てられて、均田制を拓跋族の歴史的發展の結果と見る説は、同じくこの書に収められた郭士浩「唐代的莊園」にも見られる。すなわち郭氏は「均田制が北魏に始つた」ということは、中國の封建土地所有制がより高度に發展する際に經る正常な制度ではなく、拓跋部の社會發展段階と關係があるという。

以上三國以後封建社會説を論じた幾つかの論考の内容を紹介した。筆者の非學から、分りにくい點も多々あつたと思うが、その論文の組み立て方は何れも同じようなもので、生産力の進歩、大土地所有の發達、自由小農民の農奴化、奴隸制との矛盾、封建制の成立といつた一つの圖式をもつて綴られている。また、奴婢とあれば、すぐ奴隸であるとするように概念が固定化している。そこで或はこういうことを言うと言ひ過ぎて、本質を外れた議論との誹を受けるかも知れないが、こういう圖式をどこにあてはめるかということ、封建時代の始りはどこにでも動きそうなので、或いは日本の歷研派と同じ唐代まで古代奴隸説を言う人が出ないとも言えないようである。政治や文化は上部構造で、いわば第二義的なものであるという考えが底に横たわつていたのであるが、歴史は矢張り下部構造のみでは説明しつくせない、もつと複雑なものであるのだから、なお一層総合的な考察がなされるべきではないかと思う。例えば漢・三國の時代をとつても、地方豪族の發達と地方分權化、思想・文學・藝術上の變化など、なかなか激しいものがあるのだから。寧ろそうした意味

では、唐長孺氏の業績に注目すべき點があるように思う。氏の「魏晉南北朝史論叢」(三聯書店 一九五五)などを讀むと、その一々の論考の可否はさておき、この時代をもつと総合的に捉えようとする行き方が感じ取られる。唐氏は武漢大學の教授で、現在の中國では殆んど唯一の南北朝史の専門家ではなからうか。氏には前述の著作の外に、「三至六世紀江南大土地所有制的發展」(上海人民出版社 一九五七)があり、論文としては「南朝の屯・邸・別墅及山澤占領」(歷史研究 一九五四・三)「范長生與巴氏據蜀的關係」(同 一九五四・四)「均田制度的產生及其破壞」(同 一九五六・二)がある。

* 東洋史研究文獻類目をみると戦前は元代に關する研究が多い。

唐氏は、漢代をどのような社會として捉えているかということをも明らかにしていないが、だいたい漢末を變革期と考えているのではないかと思われる。所で氏の構想の特徴は、吳—東晉—南朝に中國封建制の完結體を見ようとしている點である。東漢以來、土地制度史の上から見ると、時代は封建大土地所有制の發展へと向つていた。南北とも根本的には同じであつたが、その具體的な發展過程は、南北では異つてゐる。南方では大土地所有制は直線的に發達したが、北方では大きく迂回している。即ち南方では大土地私有が發達したが、北方では北魏に代表されるような國家が最高の土地所有者となつて封建大土地私有を阻止しようとしたからであるという(三至六世紀江南大土地所有制的發展)。また唐氏の吳より封建制が始るとする説のもう一つの據り所は、宗部に對する解釋なのである。氏はこの時代の史料に見られる宗部とは宗族を核心とする武裝組織で、こうした組織は私有財産が侵犯を受けぬように保證し、起義を防止し鎮壓する外、政府の無限の調發、とくに徭役の調發を防ぐのを目

的とした。吳もこうした宗部の一つで、幾つかの宗部を連合し、敵對する宗部を打敗つて建國した。これは魏の場合も同様であるが、吳は更に宗族間にその利益を分配するために、領兵制と復客制を施行したが、これこそ特殊な分封制度で、南北朝の封建門閥制度の原型となつたものである（孫吳建國及漢末江南の宗部與山越 魏晉南北朝史論叢所収）。これに對しては賀昌羣が「關於宗族、宗部の商榷——評魏晉南北朝史論叢」（歴史研究 一九五六・十一）を發表して唐氏の説を反駁して「宗部とは宗族部曲の意で、豪強地主階級の武裝組織を指す。唐氏は宗族と、西漢末に勃興した封建家族門閥とを混同しているので、宗族は古代の血縁並に地縁關係で構成されている氏族共同體の殘餘で、漢代には分解してしまつた。吳・魏の基礎がそうした古いものとは考えられない」と述べた。こうした論争をきつかけとして、この時代の豪族の組織や政治關係を具體的に考察して行く芽が生れればと思う次第である。

以上で、本稿を終るが、この時代の土地制度についての幾つかの論文や、學術・宗教・文化の論考、特に新中國成立後發達した考古學的な發掘・調査の報告等、觸れねばならぬ問題を一切省いてしまつたことを御託びする。最後にこの時代についての概説を擧げて結びとしたい。

范文瀾「中國通史簡編修訂本第二編」（人民出版社 一九五八）

徐德麟「三國志講話」（羣聯出版社 一九五五）

何茲全「魏晉南北朝史略」（上海人民出版社 一九五八）

韓國磐「北朝經濟試探」（上海人民出版社 一九五八）

賀昌羣「漢唐間封建的國有土地制與均田制」（上海人民出版社

一九五八）

（狩野 直禎）

均田制の崩壊と農民叛亂をめぐつて

一

南北朝の分裂の時代に續いてもたらされた隋唐の統一帝國をどのように考えるかということは、唐宋の變革を如何にとらえるかということに關連して、時代區分論の上から、これまで何度々論ぜられて來たことである。

東洋史の時代區分に關する諸説については、内藤戊申氏が「東洋史の時代區分論」（愛知大學文學論叢 九、一一。一九五四、五五）に於いて學說史的展望を試みられ、更に「中國史の時代區分論展望」（史林四一一、一九五八）にも學說史的展望をされて居られるので、ここでは細部にわたつて述べることはさげたいと思う。けれども、述論の都合で、大まかな素描をしておく、内藤虎次郎氏が、隋唐時代を貴族政治の時代の下限とし、宋以後を獨裁政治の時代とする時代區分をたてられ、宮崎市定氏によつて、ヨーロッパ世界のほかに、西アジア世界という一つの高度の文化をもつた歴史世界を考え、ヨーロッパ世界、西アジア世界と、東アジア世界との對比において、時代區分の基準を見出そうとすることが試みられ、ここに統一（古代）—分裂（中世）—再統一（近世）という共通の事象が抽出され、中國史上には、漢の統一、六朝の分裂、宋の統一が三分期點として求められることによつて強化されたいわゆる京都學派—隋唐時代を中世社會の下限と認める—と、前田直典氏が「東アジアに於ける古代の終末」に於いて提起された、東アジアに於ける古代の終末を中國では唐末・五代、日本では平安末期に求める仕方が、その後西嶋定生氏らによつて、特に唐以前には奴隸が相當多く以後は佃戸が支配的になるということから、唐以前を奴隸制社會とみよ